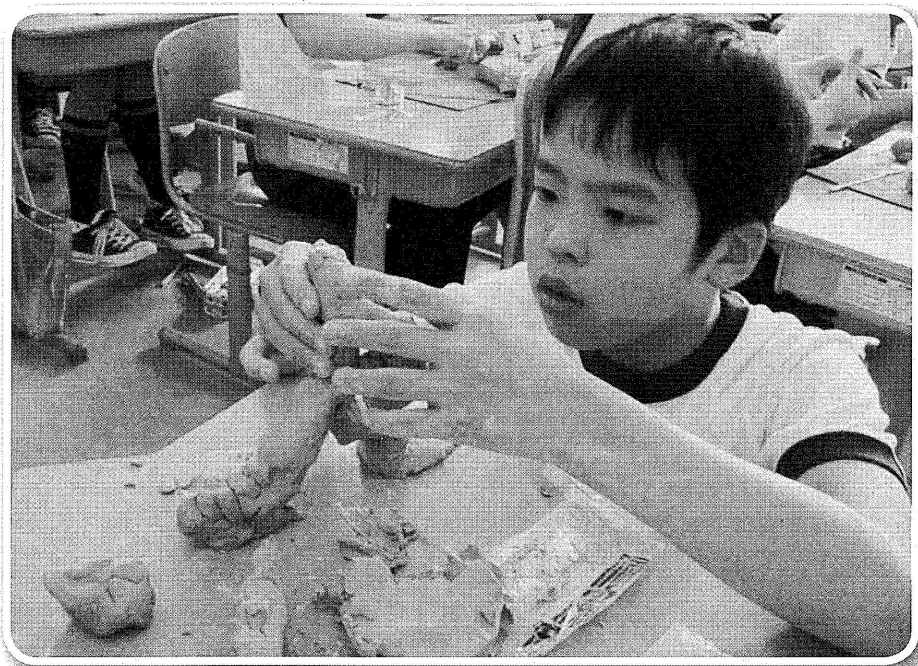


# 第2章

## 第2次研究 第2年次研究の概要

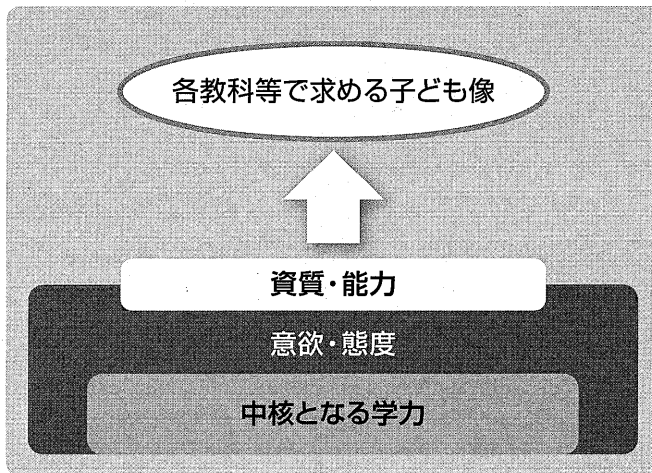


# I 小学校における第2次研究 第2年次研究の課題

## 1. 第2次研究 第1年次研究の経緯

第2次研究第1年次研究では、研究主題「創造的な知性を培う」を受け、「生きて働く力としての新たな概念、認識、価値観」を創りあげる子どもの姿を求め、カリキュラム改善と授業改善の視点から、研究を進めてきた。第2年次研究の課題と、そこに至る経緯を以下に述べる。

### (1) カリキュラム改善



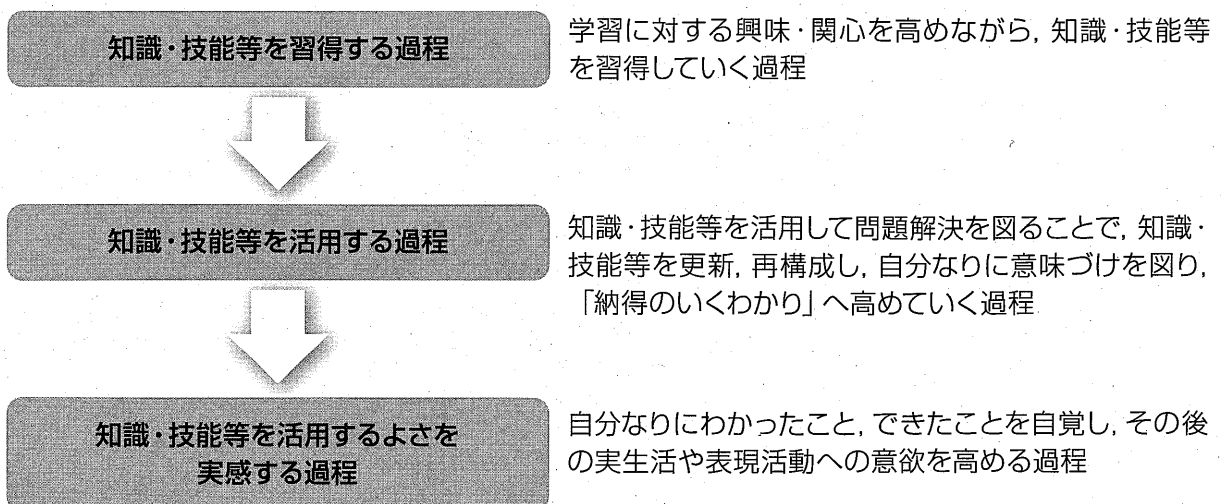
第2次研究 第1年次前期研において、各教科等で求める「生きて働く力としての新たな概念、認識、価値観を創りあげる子ども」の姿をそれぞれ描いた。そして、求める子どもを具現するために、教科特性に基づいた「中核となる学力」と、それを表出させる原動力である「意欲・態度」の2点を設定した。これらを教科として責任をもってはぐくむことで、「生きて働く力としての新たな概念・認識・価値観」の形成へと向かうと考えたのである。

以上のような求める子どもに向け、各教科等において、「内容の関連をどのように図るか」「どのような単元に重点をおいて単元を構成するか」「学年の単元配列をどのような視点から行うか」といったカリキュラム改善に取り組んできた。縦軸(幼・小・中)と横軸(重点単元のつながり)で見直し、資質・能力の段階的なはぐくみを明らかにしておくことの必要性が見えてきている。

### (2) 授業改善

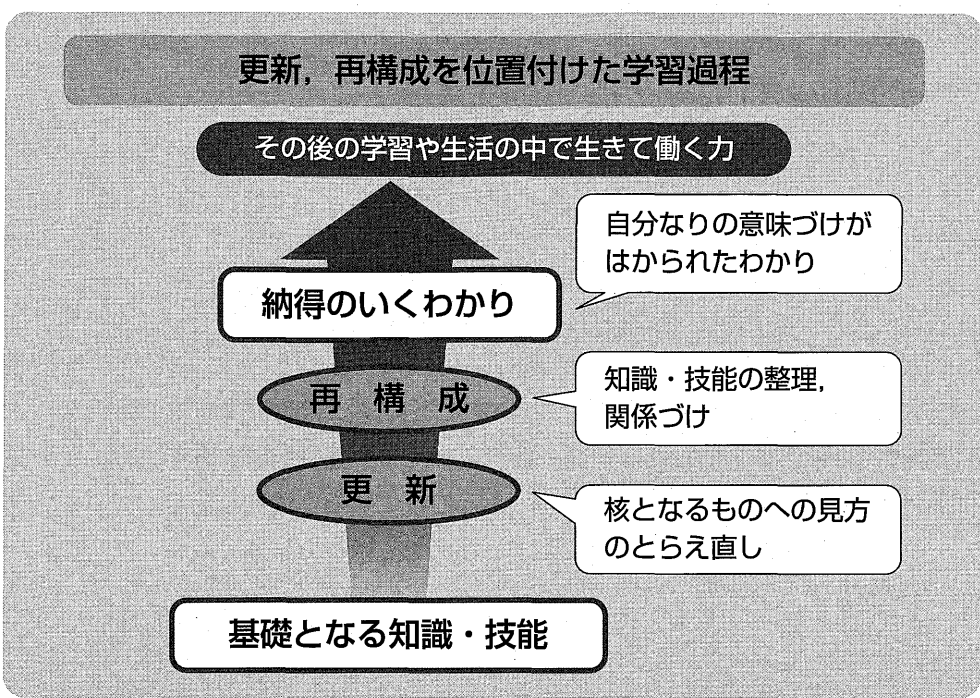
#### ① 学習過程

「生きて働く力としての新たな概念、認識、価値観」を創りあげていく学習過程を、以下のように描き単元構成をすることができた。



更新，再構成を図る学びを通して，自分なりの意味づけを図り，納得のいくわかりに高める過程として描けたことが成果である。しかし，「知識・技能の習得」の過程が，その後の学習における役割からどう位置づくのか，学習のゴールであるはずの習得が最初の過程で終わるような描きになっているという課題があった。学習過程の描き直しの必要性が見えてきている。

② 更新，再構成を図る学び



「知識・技能を活用する過程」では，自分なりに意味づけを図り「納得のいくわかり」へ高めていくことをねらっている。第2次研究 第1年次では，この過程で，知識・技能を活用し問題解決を図る力が一人一人の子どもの力としてどのように高まっていくのかを探ってきた。

子どもがその後の学習や生活の中で知識・技能を活用していくためには，その子どもが個性的なわかり方の中で知識・技能を更新，再構成し，納得のいくわかりへと高めていくという道筋がみえてきた。更新，再構成を以下のように規定した。

- 更新…学習内容の核となるものに対する見方をとらえ直すこと
- 再構成…更新された見方をもとに，知識・技能を整理したり関係づけたりすること

学習した事柄を，それを学習した文脈とは異なる文脈で利用することができる（転移）ためには，更新の中身を学習内容そのものに置くのではなく，学習内容に対するその子が見方とおいていくことの妥当性が見えてきている。

更新を学習内容と重ねておくと，全員一律の更新になる。一律に描いたために，子どもの追求の道筋，教師の働きかけが画一化していたという反省がある。中核となる学習内容は，教師の意図する学習内容として設定されるが，更新の中身は，「学習内容の核となるものに対するその子が見方」とおく必要があるが見えてきている。

更新の具体的な様相，更新，再構成を図るための働きかけをより明確にしていく必要がある。

## 2. 第2年次研究の課題

### (1) カリキュラム改善

幼・小・中の連携研究であることを踏まえて、生きて働く力に向かう中心となる資質・能力を設定し、段階性を描く。それをもとに、幼・小・中でどこまで高めるのかを明確にしながら連携を進めていく必要がある。

また、「内容の関連がどのように図られているのか」「内容の入れ替え、単元配列がどうかかわるのか」「どのような単元に重点が置かれるのか」「新学習指導要領の改訂の趣旨を生かす改善は何か」を研究計画で示していく必要がある。

### (2) 授業改善

#### ① 学習過程

新学習指導要領で唱われている習得、活用という用語との関連もあり、「知識・技能を習得する過程」「知識・技能を活用する過程」「知識・技能を活用するよさを実感する過程」のそれぞれの役割が不明確になっている。

「知識・技能を習得する過程」で大切にしたいことは、①問題解決的に学習を進めることにより単元の中でその後の学習に必要となる知識・技能を得たり、見方・考え方を整理したり高めたりすること、②問題場面や対象を広げたり変えたりしたところで知識・技能を活用してみたいという意欲を高めること、の2点である。この2点を大切にしながら、過程を整理し直す。

#### ② 更新、再構成を図る学び

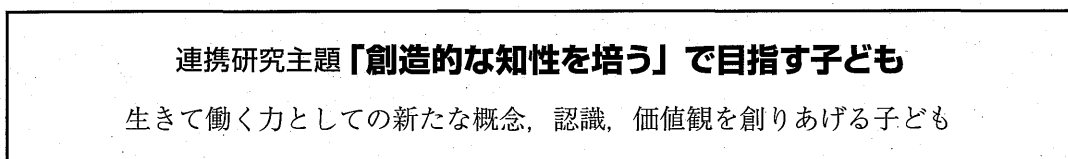
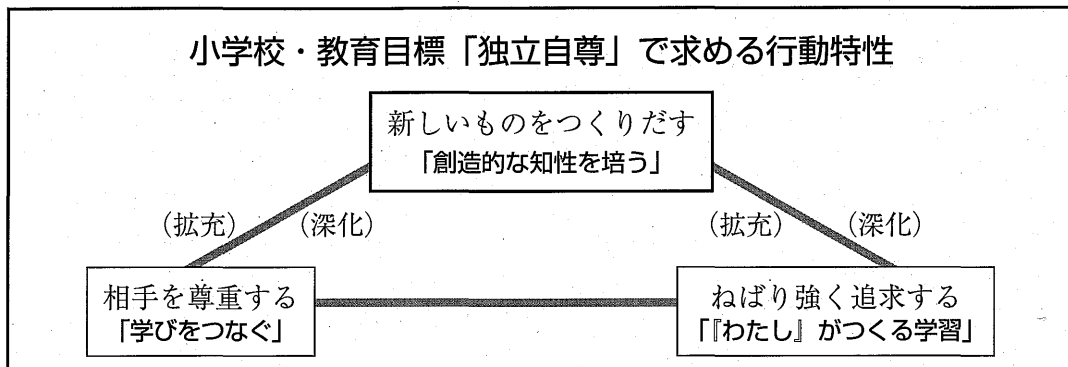
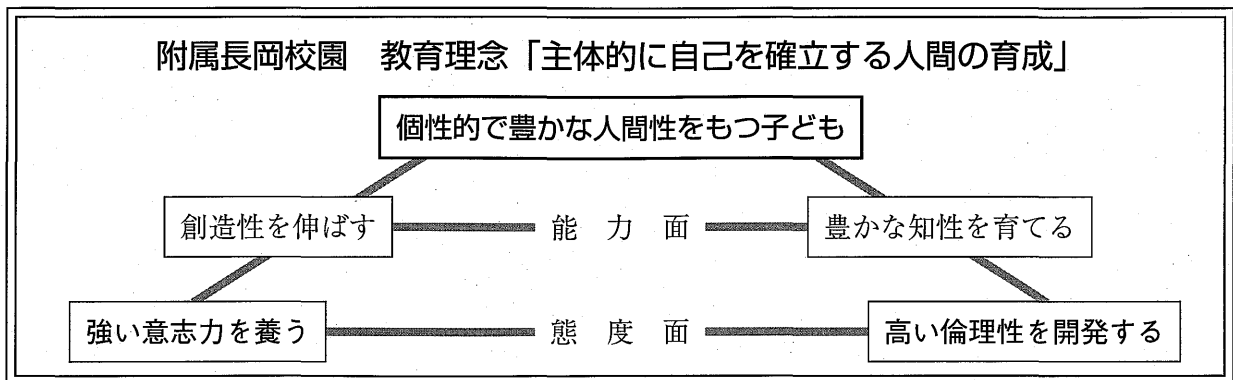
更新を学習内容と重ねておき、画一的な更新を描いたため、子どもの追求の道筋、教師の働きかけが画一化していたという反省がある。中核となる学習内容は、教師の意図する学習内容として設定されるが、更新の中身は、「学習内容の核となるものに対するその子の見方」とおき、その子の更新を予測する方法を明らかにする必要がある。

#### ③ 働きかけ

その子の更新を描くことができれば、その子の更新、再構成を図る学びを具現するための働きかけを具体化していく必要がある。更新、再構成を図る学び具現の働きかけの要件を明らかにしていく。

## Ⅱ 第2次研究における小学校の全体構想

### 全体構想図



### 第2次研究 第2年次研究の内容

- |   |  |   |
|---|--|---|
| <p>1. カリキュラム改善</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 幼・小・中連携で、生きて働く力に向かう中心となる資質・能力の設定と、段階性の描き</li> </ul> | <p>2. 授業改善</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 学習過程の整理</li> <li>・ 個の更新、再構成様相の予測の仕方の明確化</li> <li>・ 教師の働きかけの要件の明確化</li> </ul> | <p>3. 評価法の開発</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 思考力のはぐくみの評価方法の開発</li> </ul> |
|---|--|---|

### Ⅲ 小学校における第2次研究 第2年次研究の実際

#### 1. カリキュラム改善

##### (1) 求める子どもと、生きて働く力に向かう資質・能力

私たちが求めている「生きて働く力としての新たな概念、認識、価値観」の形成は、新学習指導要領で唱われている「基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得」と、「これらを活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等の育成」の双方を重視すること、即ち、知識・技能を実生活やその後の学習の中で活用する力のはぐくみとも重なる。

生きて働く力としての新たな概念、認識、価値観を創り出す子どもを各教科で求める子どもとして描き、求める子どもに向かうため資質・能力である、「中核となる学力」と「意欲・態度」を各教科で描いている。

今年度は、生きて働く力に向かう中心となる資質・能力を各教科等で、幼・小・中連携の中で設定し、段階性を描いてカリキュラム改善を図ってきた。

各教科等で求める子ども、中心となる資質・能力を以下のように整理した。具体的なカリキュラム改善については、各教科等の研究計画を参照していただきたい。

教科等	求める子ども	生きて働く力に向かう資質・能力
国語	言葉や対象を深くとらえ、理解や表現の高まり、広がりを見出す子ども	多様な文章を理解・評価しながら読み、思考を働かせて表現する力（読解表現力）
社会	社会生活を確かにとらえ、将来の社会やその中で生きる自分の在り方を見出そうとする子ども	社会的事象を関係的にとらえる力
算数	しくみやきまりを見出し統合的に考える子ども	数理を再体系化する力
理科	身の回りの事象から科学の有用性を見出していく子ども	比較する力、関係づける力、条件を制御する力、多面的にとらえ推論する力
生活	自ら対象や他者とかかわる楽しさを求め続ける子ども	願いを具現しようとする思考力・表現力
音楽	多様な表現方法を見出し、自分の表現に生かす子ども	音楽表現を構成する力
図画工作	表現と対話しながら新たな表現をつくる子ども	表現との対話力 発想力・構想力
家庭	自分と家族の生活を見つめて、よりよい生活の仕方を判断する子ども	よりよい生活の仕方を選択決定する力
体育	仲間とともに運動に働きかけ続け、自分の動きを高めたことに喜びをもつ子ども	目指す動きとの違いを見出す力 違いをもとに解決の見通しをもつ力
道徳	自分も他も共に大切に、よりよい自分を求め続ける子ども	道徳的判断力

学級活動	他者理解と自己主張のバランスを考えながら合意形成を図り、仲間と共に活動を創りあげる子ども	よりよい解決方法を見出していく 課題解決力
健康	切実感をもって健康課題をとらえ、自分の目標に向かって実践しようとする子ども	自分の生活に沿った実践方法を見出す力
科学探究	科学的根拠を基に総合的に思考し、自分の在り方を考えていく子ども	問題発見力 問題解決能力

## 2. 授業改善

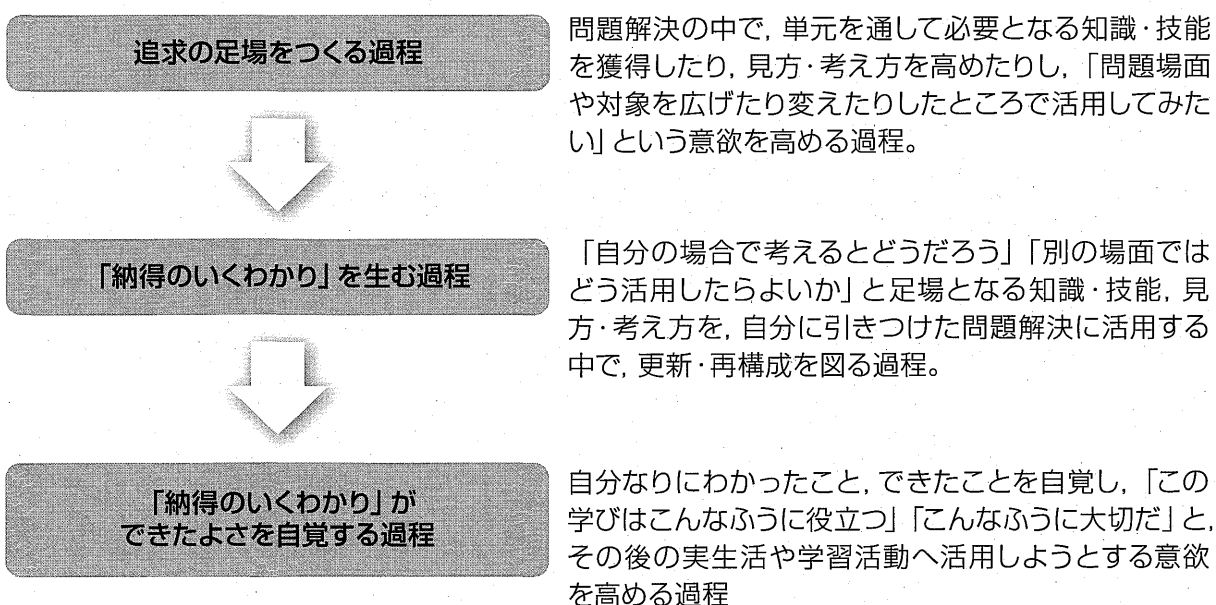
### (1) 学習過程の整理

学習内容の核となるものに対する見方をとらえ直す更新，更新をもとに知識・技能を関係づける再構成を図る学びを通して、「これまでと違ったように見えてきたぞ。」「こういう関係になっているんだ。」と自分なりの意味づけを図った深い理解である「納得のいくわかり」へと高める。

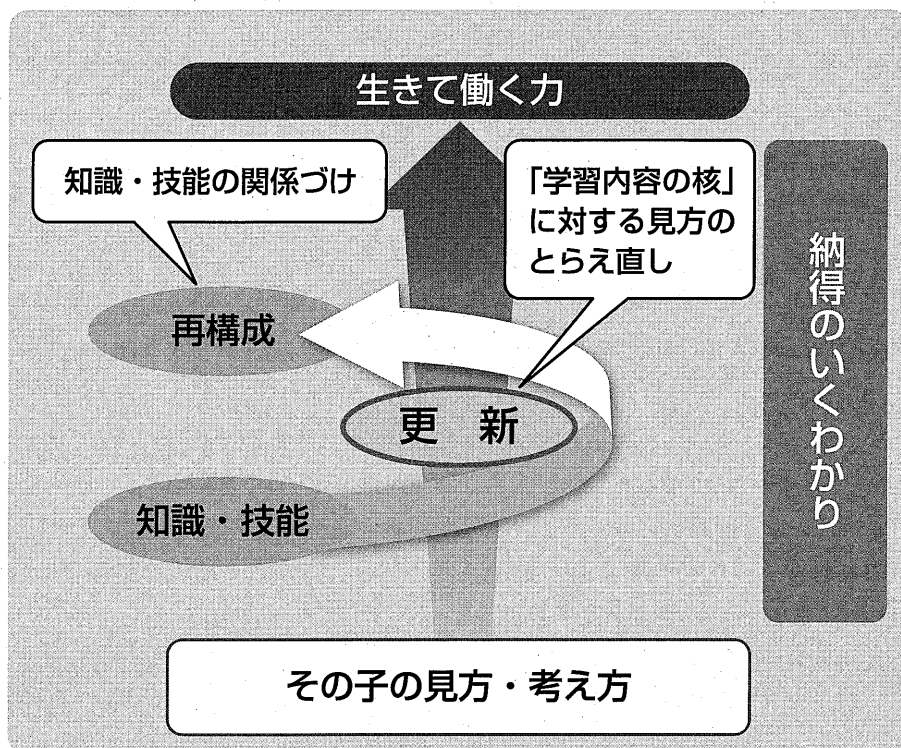
最初の過程で大切にしたいことは、①問題解決的に学習を進めることにより単元の中でその後の学習に必要な知識・技能を得たり、見方・考え方を整理したり高めたりすること、②問題場面や対象を広げたり変えたりしたところで知識・技能を活用してみたいという意欲を高めること、の2点である。この2点を大切にしながら、過程の名前を「追求の足場をつくる過程」とする。足場とは、単元の中でその後の学習に必要なその子にとっての知識・技能、見方・考え方である。

これに伴って、「知識・技能を活用する過程」を「納得のいくわかりを生む過程」に、「知識・技能を活用するよさを実感する過程」を「納得のいくわかりができたよさを自覚する過程」に変更する。

「納得のいくわかり」へ高めるために、学習過程を3つの過程として整理し直した。



(2) その子の更新の予測



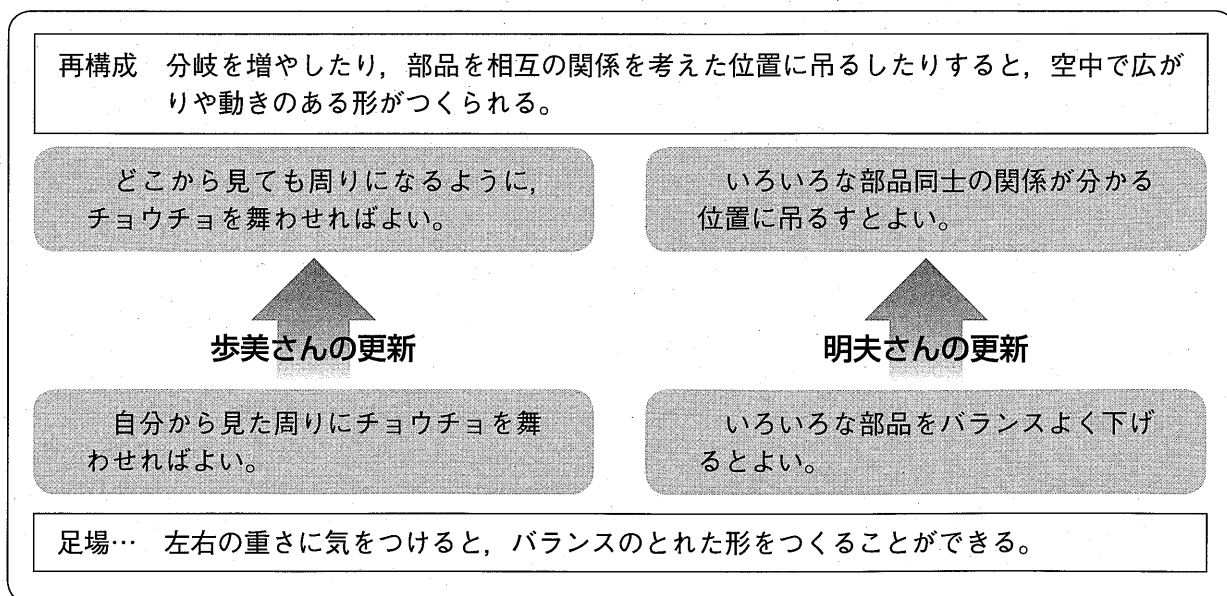
その子の更新の予測においては、その子の追求傾向から更新前の見方を予測し、その子に期待する成長と、これまでの追求や考え方から更新がどの程度可能か考えて更新後の見方を位置づけることにした。学習内容の核に対する見方の更新は、全員一律ではない。既有的見方・考え方、追求傾向がそれぞれ違うからである。

子どもは、追求の足場としての知識・技能、見方・考え方をもとに、「納得のいくわかりを生む過程」で、見方・考え方をとらえ直していく。納得のいくわかりに高めるには、

下図のように、その子の追求傾向からの個々の更新が必要である。

更新の様相について、3年図画工作科「キラクル モビール」を例に述べる。本単元のモビールとは、ppシートと針金を主材料として、部品の形やつり下げ方、下げる棒の組み合わせによって、多様な形や動きを生み出すことができるものである。

子どもたちは、追求の足場をつくる過程で、吊したときにバランスがとれるように紙をつなげていく工夫をする。その中で、下図のように「左右の重さに気をつけると、バランスのとれた形をつくることができる」という知識・技能を獲得する。



歩美さんは、モビールの構造に対する見方を「どこから見ても周りになるようにチョウチョを舞わせればよい」と更新している。自分中心、部分中心に考えがちである追求傾向をもつ歩美さんが、対象を中心として考えようとしてきた成長と言える。



歩美さんの更新は、自分中心、部品中心から対象を中心への「視点の転換」と言える。他教科・領域の単位では、「視点の付加」「視点の深化」といった様相も見えてきている。

### (3) 働きかけの要件

今年度の取組を通して、子どもが追求する材料としての「もの」「こと」は、一律なものではなく、その子の興味・関心のあるものや、その子の思考を表現したものを中心に位置づける。

働きかけについては、見方・考え方をとらえ直すため、そして個々の更新に向かうための従来の働きかけと違うポイントを明確にして、位置づけるようにしてきた。このことを通して、更新、再構成を図る学びにおける働きかけの要件を探ってきた。

2年国語科「わたしのそだてているやさいはね」の単元の例では、次の3つの働きかけの有効性が見えてきた。

- ① 「自分の表現を、更によりよい表現にしたいと意欲を高めるための働きかけ」において、取材した書く材料を仲間と交流することや、表現のよさを含むモデル文の提示が有効であった。
- ② 「子どもが自分の表現を高めていくための思考を促す働きかけ」において、発見したことをカードに書いて操作できるようにし、つけたし方を検討することが有効であった。
- ③ 「表現を検討し、表現をよりよくするための働きかけ」において、表現意図を明らかにするという視点をもって対話的活動の中で検討することが有効であった。

国語科以外の教科から見えた働きかけの有効性を整理すると、以下の要件が見えてきている。

#### ① 追求への意欲、表現への意欲を高めるための働きかけの要件

追求への意欲、表現への意欲を高めるには、自分の考えや表現のよさや課題が見えてきた状況で、モデル文や作例など新たな視点を含んだ、その後に活用できる考えや表現に出会うようにすることが大切である。

#### ② 思考の過程を促すための働きかけの要件

子どもの思考を促すためには、問いが焦点化された状況で、具体物の操作や、ウェッビングで書き表すなど、思考の過程が見えるようにすることが大切である。

#### ③ 自分の考えや表現をよりよくするための働きかけの要件

自分の考えや表現をよりよくするためには、自分の表現意図へ立ち戻る、仲間の考えとの異同について検討するなど、自分の見方・考え方、知識・技能などを自覚できるようにすることが大切である。

その子のこだわりや追求傾向から更新前の見方を予測し、願う成長から更新後の見方を描く。単元を進めていくと、当然描いたプランと子どもの追求はずれてくる。その際に、状況を見とり具体的にどう働きかけるかが重要である。個の追求に沿いながら、的確に見とり、働きかけを決定をしていく必要がある。

## Ⅳ 成果と課題

### 1. 成果

#### (1) カリキュラム改善

- ① 「生きて働く力としての新たな概念, 認識, 価値観を創りあげる子ども」を求める子ども像として描き, そこに向かう中心となる資質・能力を各教科等で設定することができた。また, 段階性を描いて取り組むことができた。
- ② 各教科等で, 重点単元の設定, 単元配列の工夫等のカリキュラム改善の視点が具体化してきている。

#### (2) 授業改善

- ① 学習過程のそれぞれの過程の意味づけを整理し, 「追求の足場をつくる過程」「納得のいくわかりを生む過程」「納得のいくわかりができたよさを自覚する過程」と修正することができた。
- ② その子の追求傾向を基に更新前の見方を予想し, その子に期待する成長とこれまでの追求や考え方から更新がどの程度まで可能かを考えて更新する姿を描くことができた。これにより, 働きかけをプランし, 追求の状況に沿って支援することが可能となる。
- ③ 更新, 再構成を図る学びに向かう働きかけの要件が見えてきた。
  - ・ 追求への意欲, 表現への意欲を高めるためのその後を選んで活用できる考え方や表現との出会い
  - ・ 思考の過程を子ども自身が自覚できるようにするため思考の過程が見える具体物の操作やウェビングなどの表現の工夫
  - ・ 自分の考えや表現のあいまいさをみだし, それを乗り越える視点を獲得できるようにするための, 比較したり関係づけたりすることに向かう視点をもった仲間との交流

### 2. 課題

#### (1) カリキュラム改善

「生きて働く力としての新たな概念, 認識, 価値観」形成に向かう中心となる資質・能力の段階性を, 実践を通して修正を図る必要がある。また, 各教科等で設定しているカリキュラム改善の視点を, カリキュラム評価を通して有効性を明らかにしていく必要がある。

#### (2) 授業改善

更新, 再構成を具現する働きかけの要件を, 授業研究を通してより具体化する必要がある。また, 更新, 再構成を図る学びを通して, 納得のいくわかりを生む授業を日常化していく必要がある。

#### 〈主な参考文献〉

- 浅沼 茂 2008 「新しい『基礎・基本』の習得」 教育開発研究所  
安彦 忠彦 2008 「活用力を育てる授業の考え方と実践」 図書文化  
市川 伸一 2004 「学ぶ意欲とスキルを育てる」 小学館  
上田 薫 1992 「人間形成の論理」 黎明書房  
江川 玫成 1996 「発想のヒント 創造的思考力をのばす」 大日本図書  
梶田 叡一 1996 「<自己>を育てる 真の主体性の確立」 金子書房  
佐伯 胖 2003 「『学び』を問い続けて」 小学館  
佐伯 胖 2004 「『わかり方』の探究」 小学館  
田中 耕治 2004 「学力と評価の“今”を読み解く」 日本標準  
西林 克彦 1997 「『分かる』のしくみ」 新曜社  
人間教育研究協議会  
2008 「教育フォーラム 41『新しい学習指導要領～カリキュラム改革の理念と課題』」 金子書房  
ドミニク・S・ライチェン, ローラ・H・サルガニク編著/立田 慶裕監訳  
2006 「キーコンピテンシー」 国際標準の学力をめざして」 明石書店